

通信制大学におけるアカデミックライティング教育の実践

— 「レポートの書き方入門」を例に —

野口 久美子

Practice of Academic Writing Education in Correspondence University:
A Case Study of Introduction to Report Writing

NOGUCHI Kumiko

キーワード：通信制大学、初年次教育、アカデミックスキル、アカデミックライティング
Keywords: Correspondence University, First-Year Experience, Academic Skills, Academic Writing

1 はじめに

本稿の目的は、筆者が八洲学園大学において 2017 年度から 2022 年度まで担当した「レポートの書き方入門」の教育実践についてまとめ、アカデミックライティング教育の課題を考察することである。

「レポートの書き方入門」は、大学通信教育設置基準第 3 条の「印刷教材等による授業」（本学ではテキスト履修と称する）である点に特色がある。課題レポートの添削を数回繰り返すことでアカデミックライティングの力を習得できるように授業設計を行ったが、テキストベースの添削指導にはいくつかの困難もあった。課題内容の変遷と添削指導の状況を整理するとともに、指導上の課題を検討することで、通信制大学におけるアカデミックライティング教育を考える材料を提供したい。

2 通信制大学におけるアカデミックライティング教育

文部科学省が 2021 年度に行った調査によると、2020 年度の大学における初年次教育の導入率は 96.8%であり、レポート・論文の書き方などの文章作法を身に付けるためのプログラムを実施する大学は 91.9%であるという⁽¹⁾。2009 年度には初年次教育の導入率が 84.4%、レポート・論文の書き方などのプログラム実施大学が 72.9%であった⁽²⁾ことから、初年次教育、アカデミックライティング教育に取り組む大学は着実に増加しているといえる。

通信制大学におけるアカデミックライティング教育の実施状況は定かではないが、本学と同様に通信教育課程のみを設置する通信制大学も初年次教育に相当する科目群、アカデミックライティング教育科目を設置している。放送大学では基盤科目として「日本語リテラシー」、「日本語リテラシー演習」、「日本語アカデミックライティング」を開講している⁽³⁾。星槎大学では教養科目群として「アカデミック・スキル」を開講している⁽⁴⁾。サイバー大学では教養科目として「スタディスキル入門」、「ロジ

カルライティング」を開講している⁽⁵⁾。東京通信大学では教養教育科目として「アカデミックリテラシー」、「日本語文章論」、「アカデミックライティング」を開講している⁽⁶⁾。

本学においては 2016 年度時点で、2 単位のスクーリング履修科目として「論述カスシル (アカデミック・ライティング)」、2 単位のテキスト履修科目として「情報リテラシー (情報活用から考え方・書き方まで)」が開講され、アカデミックライティング教育の役割を担ってきた。

3 「レポートの書き方入門」の概要

本章では「レポートの書き方入門」開講の経緯、シラバスの内容、開講後の履修状況についてまとめる。

「レポートの書き方入門」は 2017 年度春期に新規開講した。本学の科目区分では基礎科目に該当する。本学の学生支援センター発行の「学修のてびき」においては正科生が入学当初に履修する入門科目として紹介されており、正科生 (1 年次入学) の履修計画例では 1 年次前半、つまり入学してすぐに「初年次セミナー」と「レポートの書き方入門」を履修することを推奨している⁽⁷⁾。

先述の通り、本学では「論述カスシル (アカデミック・ライティング)」と「情報リテラシー (情報活用から考え方・書き方まで)」の 2 科目がアカデミックライティング教育の役割を果たしてきた。しかし、2016 年度末をもって「情報リテラシー (情報活用から考え方・書き方まで)」担当の非常勤講師が退職することになり、科目を引き継ぐ必要が生じた。引き継ぎの検討過程で、「論述カスシル (アカデミック・ライティング)」担当の非常勤講師 (2016 年度当時) から文章表現を学ぶことのできる科目があると良いとの助言があり、それを踏まえ、アカデミックライティングの基礎の習得をねらいとした科目に再編成することになった。

シラバス記載項目である科目の概要、到達目標 (学習の要点)、学習の進め方については 2017 年度に開講以来変更せず、同様の方針を採っている (表 1 参照)。到達目標は以下の 2 点である。

- ① レポートを書くための基本ルールを理解し、実践できる。
- ② 分かりやすい日本語を書くための方法を理解し、実践できる。

到達目標①レポートを書くための基本ルールについては、レポートの種類・構成、適切なタイトルの付け方、引用・要約の方法、参考文献リストの書き方などを取り上げることとした。レポート執筆の段取りや社会調査法の基礎、グラフや表の示し方、考察の深め方については本科目では扱わず、「論述カスシル (アカデミック・ライティング)」に譲り、棲み分けを行った。到達目標②分かりやすい日本語を書くための方法については、常体と敬体の区別、主語・述語の対応、事実と意見の区別、パラグラフや段落の重要性を中心に扱うこととした。

教科書は、桑田てるみ編『学生のレポート・論文作成トレーニング：スキルを学ぶ 21 のワーク』実教出版、2015 を指定し、教科書による自学自習で基本的なスキルを学べるようにした。その上で、2 回の課題レポートを作成する。本科目はアカデミックライティングを習得することを目的としているため、提出された課題レポートに対して複数回の添削を行うこととした。つまり、履修者は必ず一回以上レポートを修正し、再提出をする。レポートの修正作業を通して、徐々に大学のレポートに求められる要件を理解できるよう考慮した。

表 1 「レポートの書き方入門」科目の概要、到達目標、学習の要点 (2017 年度春期シラバス)

| 科目の概要 |
|---|
| <p>通信制大学である本学では、ほとんどの科目でレポートや論文を書くことが求められます。しかし、これまでレポートの書き方を学んだ経験のない方もいるでしょう。久々にまとめた文章を書くため、レポート作成に不安があるという方もおられると思います。</p> <p>本科目では本学で学ぶにあたり、最低限習得しておきたいレポート執筆スキルを扱います。本科目で扱うスキルはどの科目のレポートを書く際にも役に立つものばかりです。計画的にワークをこなすことでレポート執筆スキルを身につけられれば、自信を持って各科目のレポート作成に着手できるようになります。</p> <p>また、論理的で説得力のあるレポートの書き方を身につけると実社会でも必ず役に立ちます。他者に自分の考えやアイデアを分かりやすく伝え、読む人を納得させることのできる文章を書けるようになれば一生のスキルとなるでしょう。就職活動、キャリアアップにも有効です。</p> |
| 到達目標 (学習の要点) |
| <p>次の 2 つのスキルを身につけることを最低目標とします。</p> <p>(1) レポートを書くための基本ルールを理解し、実践できる (レポートの種類・構成、適切なタイトルの付け方、引用・要約の方法、参考文献リストの書き方、剽窃は何故いけないのかなど)</p> <p>(2) 分かりやすい日本語を書くための方法を理解し、実践できる (話し言葉と書き言葉の区別、主語・述語の対応、事実と意見の区別、パラグラフ (段落) の重要性など)</p> <p>さらに、教科書のワークとレポート執筆を通して、以下のスキルについても学べるようにします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・レポートを書く際に参照する文献を収集する方法 (文献の入手方法、図書館の仕組み、検索エンジンの使い方など) ・文献の読み方、整理の仕方 (文献の内容を効率よく把握するための読み方、文献リストの作り方など) |
| 学習の進め方 |
| <p>まずは、教科書 (桑田てるみ編『学生のレポート・論文作成トレーニング: スキルを学ぶ 21 のワーク』実教出版、2015) の指定箇所を読み、ワークをこなしていただくことで論文作成の基礎知識を身につけてもらいます。ワークは教科書に掲載されているものの他、担当者から提示することもあります。</p> <p>第 1 回、第 2 回課題を通して、実際にレポートを書く作業を行います。添削を繰り返すことで、レポートの型、正しい日本語表現を自分のものにしていけるよう支援します。そのため、1 回で合格になることはまずないと思ってください。</p> |

教科書の他に、筆者作成のオリジナル教材を配信した。教材は教科書の内容の補足説明を主としたテキストと「レポートの書き方入門」ループリック (自己点検評価表) である。前者は履修者の計画的な学習を促す意図から、スケジュールを決めて定期的に配信した。後者のループリックとは学習到達状況の評価するためのツールである。ループリックは開講時に配信し、本科目で学ぶスキルの習得状況を自分で確認できるようにした。その他、本学の e-ラーニングシステムの機能の一つである「科目からのお知らせ」機能を使い、レポートの提出を適宜促すなどした。

成績評価は 2 回の課題レポートがそれぞれ 25 点、科目修得試験（レポート形式）50 点の配分で、総合的に判断するとした。科目修得試験に関しては、ルーブリックをもとに評価を行った。

次に履修者数の推移、修得状況について説明する。表 2 は期ごとの履修者数及び単位修得者数、単位修得率を示したものである。2022 年度秋期については執筆時点で成績登録が完了していないため、履修者数のみ示す。春期の履修者は 40～90 名、秋期は 20～40 名程度で推移しており、4 月開講の春期の履修者が多い傾向にある。2021 年度以降、履修者が増加したのはコロナ禍により入学者が増えたことに伴うものであると考えられる。単位修得率は 5～7 割である。筆者が担当する児童サービス論(T)の修得率は約 8 割であり（2021 年度春期：78.4%、秋期：81.0%）、それと比べると修得率は高いとはいえない。本科目では 2 回の課題レポートに合格し、科目修得試験（レポート）を提出した者はほぼ全員単位修得に至っていることから⁽⁸⁾、未修得者は一度も課題レポートを提出しなかった者、途中で履修放棄をした者である。

表 2 期ごとの履修者数と単位修得者数、単位修得率

| | | 2017 年度 | 2018 年度 | 2019 年度 | 2020 年度 | 2021 年度 | 2022 年度 |
|----|-----------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 春期 | 履修者数（人） | 55 | 49 | 54 | 39 | 81 | 89 |
| | 単位修得者数（人） | 34 | 33 | 36 | 25 | 52 | 59 |
| | 単位修得率（%） | 61.8 | 67.3 | 66.6 | 64.1 | 64.1 | 66.2 |
| 秋期 | 履修者数（人） | 24 | 28 | 20 | 39 | 40 | 35 |
| | 単位修得者数（人） | 12 | 20 | 12 | 21 | 28 | - |
| | 単位修得率（%） | 50.0 | 71.4 | 60.0 | 53.8 | 70.0 | - |

4 「レポートの書き方入門」の年度ごとの指導内容

本章では、「レポートの書き方入門」の課題レポート及び科目修得試験の内容と添削指導の変遷について述べる。2017 年度春期に新規開講してから、履修者から提出されたレポートの内容や添削状況を勘案し、課題レポートの変更を 2 度行った。そのため、第 1 期：2017 年度～2019 年度春期、第 2 期：2019 年度秋期～2020 年度、第 3 期：2021 年度～2022 年度の 3 期に分けて整理する。

4.1 第 1 期：2017 年度～2019 年度春期

表 3 は 2017 年度春期に出題した課題レポートの内容をまとめたものである。指定教科書では代表的なレポートの種類として、①課題図書をもとめた上で自分の意見や内容の批評を書く課題であるブックレポート、②調べた内容を自分の言葉で説明したりまとめたりする課題である報告型レポート、③調べたことに加え、論点に対する主張・意見、その根拠を盛り込む論文があるとしている⁽⁹⁾。本科目では、第 1 回課題をブックレポート、第 2 回課題を報告型レポートとし、アカデミックライティングの基礎力を身につけることをねらいとした。

表 3 課題レポートの内容 (2017 年度春期シラバス)

| | |
|---------|--|
| 第 1 回課題 | <p>岩波書店「岩波ブックレット」シリーズから任意の一冊を選び、ブックレポートを作成していただきます。ここで選択した本で扱っているテーマに基づき、第 2 回課題作成に取り組んでいただきますので、興味のあるテーマ、調べて楽しいと思えるテーマの本を選択してください。</p> <p>本課題におけるブックレポートに必須の要素は次の 3 点です。「2. 選択した本の内容の要約」に全体の 8 割の分量を費やしてください。文字数は 1600～2000 字程度とします。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. この本を選択した理由 2. 選択した本の内容の要約 3. 著者の主張のうち、重要だと思う点を 1 点取り上げ、自分の考えを簡潔にまとめる。 |
| 第 2 回課題 | <p>第 1 回課題で選択した本のテーマに関する報告型レポートを作成していただきます。具体的なテーマは第 1 回課題の添削過程で担当者と相談の上、決定します。</p> <p>本課題における報告型レポートに必須の要素は次の 3 点です。「2. 資料を調べて分かったこと」を中心にまとめてください。文字数は 2000～3000 字程度とします。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. このテーマを選んだ理由 2. 資料を調べて分かったこと (3 つ以上の文献を参照し、調べてわかったことを要約してください) 3. 調べた中で特に注目したいと思った点、課題だと思った点を 1 点取り上げ、自分の考えを簡単にまとめる。 |

第 1 回課題については岩波ブックレットから任意の一冊を選び、ブックレポートを作成することとした。岩波ブックレットを課題図書とした理由は、2000 字程度の要約に適当なボリュームであること、大学生にとって身近な問題を学ぶことができる入門書であること、500～700 円程度と安価であることが挙げられる。開講当初は任意の一冊を自由に選択してもらっていたが、タイトルによっては図表やグラフ、写真が多用されているなど、要約が困難なケースがあったため、翌期には筆者が指定した中から 1 冊を選択する方式に変更した⁽¹⁰⁾。

第 2 回課題は、第 1 回課題に選んだ岩波ブックレットのテーマに関連した報告型レポートとした。テーマに関しては第 1 回課題の添削過程で筆者が助言し、スムーズに文献調査に進めるように配慮した。レポートで取り上げる文献は 3 つ以上とし、複数の資料を用いてまとめるよう促した。

科目修得試験については、第 2 回課題レポートを自身で手直するとともに、考察を加筆して提出することとした。

複数回の添削（履修者からみると、修正・再提出）が必須であることや教科書や教材を参照しながら学習してほしいことはシラバスで周知したものの、いざ指導を始めると、一切修正の跡がないレポートを再提出する履修者、教科書や配信教材による自学自習が十分とはいえない履修者が見受けられた。そのため、2018 年度春期には成績評価の際に受講態度（添削過程での修正状況、配信した教材の閲覧状況など）を考慮する必要があるとシラバスに明記した。

開講当初は添削回数の上限を設定せず、改善点がある場合は何度でも修正・再提出を求める心づも

りでいた。納得いくまで何度でも修正するチャンスがあるということだが、再提出に際限がないことを負担に感じた履修者もいたようであった。そのため、2019 年度からは添削の上限を原則 2 回までに変更した。希望者には上限を超えての添削も可能であること、添削内容について質問がある場合は SOBA マナベルの質問機能を適宜利用してほしいことを周知した。

4.2 第 2 期：2019 年度秋期～2020 年度

表 4 は 2019 年度秋期の課題レポートの内容をまとめたものである。第 1 回課題、第 2 回課題ともに設問を変更した。

表 4 課題レポートの内容 (2019 年度秋期シラバス)

| | |
|---------|--|
| 第 1 回課題 | <p>600 字以上 800 字以内のテーマ作文を 2 つ作成してください。</p> <p>条件は、(1) 自分の意見を必ず書くこと、(2) タイトルを工夫して付けることです。作文のテーマは下記から 2 つ選択してください。テーマは自身の視点で、狭義に解釈しても構いません (例：報道を選択→「2019 年参議院議員選挙におけるテレビ報道について：政党別の取り上げ方を中心に」)</p> <p>・作文のテーマ (2 つ選択してください)</p> <p>愛、スポーツ、健康、教育、生涯学習、バリアフリー、オリンピック、公共交通、SNS (Social Networking Service)、報道、働き方、食品、マイノリティ、言葉</p> |
| 第 2 回課題 | <p>自分で問いを設定し、文献で調べてわかったことを 2000～3000 字程度にまとめてください。条件は以下の通り。</p> <p>(1) 文献は 2 つ以上引用すること。</p> <p>(2) 文献には書籍だけでなく、雑誌記事・論文、新聞記事、インターネットの記事やデータなどが含まれる。ただし、インターネットの記事は極力、1 つにとどめること。</p> <p>(3) 問いは新たに設定しても良いし、第 1 回レポートで選んだテーマに関連させても可。</p> <p>(4) レポートの中で、問いの設定理由について簡単に触れること。</p> |

第 1 回課題では 600 字以上 800 字以内のテーマ作文を 2 つ作成することを課した。ブックレポートからテーマ作文に変更したのは、(平易ではあるものの) 学術的な書籍を読み、その内容を要約するという課題は大学に入学したての学生、特に高校を卒業してすぐに本学に入学した者にとってはハードルが高いのではないかと考えたからである。第 1 回課題については、本科目の到達目標のうち「分かりやすい日本語を書くための方法の理解、実践」に注力することとし、学生の負担になりすぎない課題にすることとした。

第 2 回課題については、本科目のもう一つの到達目標である「レポートを書くための基本ルール of 理解、実践」を目指し、自分で問いを設定し、文献を調べて分かったことをまとめる報告型レポートの作成を課することとした。変更点としては、自ら問いを設定すること、引用を行うこと、図書やウェブサイトだけでなく、雑誌記事・論文や新聞記事など複数のメディアを探索するよう促したことである。

科目修得試験については第 2 回課題レポートと同じ条件で、別の問いを設定したレポートを執筆するよう求め、課題レポートの執筆、修正で学んだことが身についているかを確認した。

4.3 第 3 期：2021 年度～2022 年度

表 5 は 2021 年度春期の課題レポートの内容をまとめたものである。課題レポートの内容を再び変更し、ブックレポートと報告型レポートの二本立てとすることにした。

表 5 課題レポートの内容 (2021 年度春期シラバス)

| | |
|---------|--|
| 第 1 回課題 | <p>小川仁志著『レポート・論文の教科書：5 日で学べて一生使える！（ちくまプリマー新書 311）』筑摩書房、2018. を読み、以下に指定する章（ページ）についてブックレポートを作成して下さい。要約のみで結構です。考察は必要ありません。文字数は 1600～2000 字程度とします。</p> <p><指定章></p> <ul style="list-style-type: none"> ・第 1 日 大学生のお作法—アカデミックライティングを知ろう！— (p.14-42) ・第 2 日 書き方の基本—まずはこれを押さえよう！— (p.43-94) ・第 5 日 よりよいものを書くための方法—ここまでできればバッチリ！— (p.166-181 / p.182 以降は省略) <p>ブックレポートの書き方については『学生のレポート・論文作成トレーニング：スキルを学ぶ 21 のワーク』の「ブックレポートに書くべき内容 (p.26)」、「文章例②ブックレポートを書いてみよう (p.30-31)」を参照してください。</p> |
| 第 2 回課題 | <p>自分でテーマを設定し、調べたことを報告型レポートとしてまとめて下さい。文字数は 1600～2500 字程度とします。条件は以下の通り。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 文献は 2 つ以上引用すること。直接引用、間接引用の両方を反映させること。 (2) 文献には書籍だけでなく、雑誌記事・論文、新聞記事、インターネットの記事やデータなどが含まれる。ただし、インターネットの記事は極力、1 つにとどめること。 (3) レポートの中で、テーマの設定理由について簡単に触れること。 <p>報告型レポートの書き方については『学生のレポート・論文作成トレーニング：スキルを学ぶ 21 のワーク』の「報告型レポートに書くべき内容 (p.25)」、「文章例①報告型レポートを書いてみよう (p.28-29)」を参照してください。</p> |

第 1 回課題の設定問を再び変更したのは、800 字程度のテーマ作文では文章表現について理解を深めるのに十分とは言えないことに加え、本学のテキスト履修科目においては教科書の指定部分を要約する課題が多く、入学当初にブックレポートを書く練習をすることは必須であるという考えに至ったためである。課題の変更を検討していた時期に、小川仁志著『レポート・論文の教科書：5 日で学べて一生使える！（ちくまプリマー新書 311）』筑摩書房、2018 に出会い、平易な文章で要約に向いていること、アカデミックライティングを学ぶ意味から論理的な文章を書くコツまでが解説されており、

開講当初から指定している教科書（『学生のレポート・論文作成トレーニング：スキルを学ぶ 21 のワーク』）を補う内容であったことから、本書を課題図書として採用した。

また、第 2 回課題については問いではなく、調べるテーマの設定に変更を行った。良質な問いを立てられるようになるには相応の時間がかかり、一回の課題で指導するのは限界があったからである。実際、数回のテキストベースの添削指導で問いの立て方を習得できる学生は少数にとどまるというのが実感である。大学生には問いを立てる能力を身につけてほしいが、到達目標である「レポートを書くための基本ルールを理解、実践」に立ち返り、引用の仕方や参考文献リストの作り方、参照する文献の選び方などの助言に注力することとした。引用については直接引用、間接引用の両方をレポートに反映するよう指示した。

科目修得試験については第 2 期と同じく、2 回目の課題レポートと同じ条件で報告型レポートを執筆するよう求めた。

5 おわりに

本稿では、2017 年度から 2022 年度に筆者が担当した「レポートの書き方入門」の教育実践について整理した。アカデミックライティングにおいて、学生が躓きやすいポイントは共通している。とりわけ以下の指導事項については丁寧に解説する必要があるだろう。

- ・ 他者に伝わる文章の書き方（例えば、一文が長く、文意が取りにくい文章を避けること、主語と述語のつながりを意識すること）
- ・ パラグラフ・ライティングあるいは段落の設定の方法
- ・ 章立ての方法（レポート全体の構造を意識すること）
- ・ 書籍の奥付の読み方（例えば、出版者名とシリーズ名の区別、出版者名と発行者の区別）
- ・ 雑誌記事・論文を参照した場合の出典の記載方法（例えば、著者名と記事タイトルだけでなく、雑誌名、巻号、出版年を記載する必要があること、オープンアクセス論文に関してはウェブサイトではなく、雑誌論文として記載する必要があること）
- ・ 大学のレポートにふさわしい情報源の見極め方（レポート評価の際にはどのような情報源を参照したかについても問われること）
- ・ 自身の意見と他者の意見を区別し、書き分ける方法
- ・ 引用文の書き方、剽窃にならない引用の方法

最後に、アカデミックライティング教育の課題について指摘したい。本学のようにすべての学修がインターネットで完結する環境では教員と学生とが直接顔を合わせる機会は限られる。そのような環境で、特にテキストに限定されるやり取りで添削指導を行うのは非常に困難であるというのが実際に指導にあたってみての実感である。「レポートの書き方入門」は大学通信教育設置基準第 3 条の「印刷教材等による授業」として開講され、提出されたレポートの内容から履修者の理解度を確認し、個別に見直しが必要な点、理解が不足していると思われる点を指摘、添削するという形を採ってきた。筆者は履修者が初学者であることを念頭においた添削を心がけてきたつもりである。しかし、文章表現やレポート全体の構造に及ぶ見直しが必要な場合、込み入った指摘をすることになり、添削コメントがやむを得ず長文になることもあった。その結果、添削コメントの趣旨が理解されたとは言い難いレポートが再提出されるケースも散見され、結果として履修者の理解が不十分なままに履修が終わって

しまうジレンマを感じてきた。習得させたいスキルを細かく分割し、確認テストを都度行うなど、スモールステップで目標達成に導く方法を検討しても良いだろう。「印刷教材等による授業」として開講するとしても、解説動画をオンデマンド配信する、リアルタイム配信型授業を数回実施するなど、弾力的な授業運用の検討余地はある⁽¹¹⁾。

関連して、何をどこまで添削すべきなのかという悩みも常に抱えてきた。事細かに修正指示を出してしまっただけでは、履修者は言われたことを直すだけになってしまう。ただでさえ、テキストベースの添削指導は一方的になりがちであることは否めない。履修者の中には何度もレポートを修正しなければならないことに苦痛を感じる者もいたと思われるが、何のためにレポートの見直し、修正を行っているのかを確認し、目的意識の共有を図ることが肝心であろう。添削者である教員は履修者の理解度に応じた添削を行うと同時に、添削指導は学生とのコミュニケーションの場であるという意識を持つことも求められる。

通信制・通学制を問わず、共通していえる課題については 2 点指摘したい。ここに挙げる課題はアカデミックライティング教育に関する先行研究において指摘されていることばかりであるため、本学の状況を念頭に置いて簡潔に述べる。一点目は、履修放棄を防ぐための対策である。「レポートの書き方入門」は他科目に比べ、単位修得率が低い傾向にあった。課題未提出の履修者に対して、個別に提出を促すなどの対応が必要であろう。また、初年次教育関係科目の履修を終えた後のフォローも肝要である。ライティングセンターの設置⁽¹²⁾、ティーチングアシスタントやラーニングアドバイザーによる学修サポートが考えられよう。二点目は、他科目との接続である。これはひいては初年次教育の強化という課題にも通ずる。「レポートの書き方入門」は本学では基礎科目として開講され、「初年次セミナー」とともに初年次教育の役割を担ってきた。しかし、初年次教育の重要性が全学で共有されているとは言い難い。大学のレポートに求められる要件、アカデミックライティングを初年次教育で扱う意義についての認識は教員間でも違いがあるように思われる。卒業までの 4 年間を見通したカリキュラム編成についての議論と共通理解が必要であろう。

注・参考文献一覧

- (1) 文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について（令和 2 年度）」文部科学省ウェブサイト、https://www.mext.go.jp/content/20230117-mxt_daigakuc01-000025974_1r.pdf, (2023-01-21 参照)。
- (2) 文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について（平成 21 年度）」https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2011/08/25/1310269_1.pdf, (参照 2023-01-21)。ちなみに同調査においては、放送大学以外の通信制大学は 2012 年度まで調査対象外とされていた。
- (3) 放送大学「授業科目案内：大学（教養学部教養学科）」https://www.ouj.ac.jp/kamoku/kyouyou/C/kiban_kiban/, (参照 2023-01-21)。
- (4) 星槎大学「開講科目紹介」<https://seisa.ac.jp/program/subject/>, (参照 2023-01-21)。
- (5) サイバー大学「教養科目紹介」https://www.cyber-u.ac.jp/majorlist/common_majorlist.html#common_majorlist_careerdesign, (参照 2023-01-21)。
- (6) 東京通信大学「開講科目一覧・シラバス」<https://www.internet.ac.jp/faculty/list/>, (参照 2023-01-21)。
- (7) 「2022（令和 4）年度 八洲学園大学生涯学習学部生涯学習学科 学修のてびき」第 2 版、八洲学園大学学生支援センター、2022。
- (8) 科目修得試験において剽窃が確認された履修者を除く。
- (9) 桑田てるみ編『学生のレポート・論文作成トレーニング：スキルを学ぶ 21 のワーク』実教出版、2015。参照箇所は p.24。
- (10) 2017 年秋期から 2019 年春期に指定した岩波ブックレットのタイトルは以下の 15 冊である。入手

- 困難なものを除いたり、新たなタイトルを加えたりするなど、適宜入れ替えを行った。
- ・ 安部誠治『公共交通が危ない：規制緩和と過密労働（岩波ブックレット no.665）』2005.
 - ・ 毎日新聞生活報道センター『高齢ドライバー：加害者にならない・しないために（岩波ブックレット no.716）』2008.
 - ・ 竹信三恵子『女性を活用する国，しない国（岩波ブックレット no.791）』2010.
 - ・ 新井紀子『ほんとうにいいの？デジタル教科書（岩波ブックレット no.859）』2012.
 - ・ 上林陽治『非正規公務員という問題：問われる公共サービスのあり方（岩波ブックレット no.869）』2013.
 - ・ 牧下圭貴『放射能汚染と学校給食（岩波ブックレット no.875）』2013.
 - ・ 土井隆義『つながりを煽られる子どもたち：ネット依存といじめ問題を考える（岩波ブックレット no.903）』2014.
 - ・ 中嶋哲彦『教育委員会は不要なのか：あるべき改革を考える（岩波ブックレット no.908）』2014.
 - ・ 宮島喬，鈴木江理子『外国人労働者受け入れを問う（岩波ブックレット no.916）』2014.
 - ・ 柳瀬陽介，小泉清裕『小学校からの英語教育をどうするか？（岩波ブックレット no.922）』2015.
 - ・ 山田昌弘『女性活躍後進国ニッポン（岩波ブックレット no.934）』2015.
 - ・ 小谷みどり『だれが墓を守るのか：多死・人口減少社会のなかで（岩波ブックレット no.935）』2015.
 - ・ 普光院亜紀『保育園は誰のもの：子どもの権利から考える（岩波ブックレット no.977）』2018.
 - ・ 今野晴貴，嶋崎量編『裁量労働制はなぜ危険か：「働き方改革」の闇（岩波ブックレット no.980）』2018.
 - ・ 小笠原博毅，山本敦久『やっぱりいらない東京オリンピック（岩波ブックレット no.993）』2019.
- (11) 他の通信制大学では、印刷教材等による授業と面接授業ないしメディアを利用して行う授業とを組み合わせ実施するテキストスクーリング授業の開設例がある。
- (12) 井下千以子編著『思考を鍛えるライティング教育：書く・読む・対話する・探究する力を育む』慶應義塾大学出版会、2022. では創価大学、青山学院大学、関西大学、早稲田大学のライティングセンターの事例が紹介されている。

(受理日：2023 年 2 月 9 日)

(のぐち くみこ・八洲学園大学 生涯学習学部 生涯学習学科 教授)